

名所風物抄

也

911.2
4
1444

77029

月
そのころ名田の中へ入るは作ちぬ改山梅のき

第五
 子育
 方、立て、鶴を、分、山梅の、石、面入、少、ゆゑ、秋、入、う、を、を、
 方、
 方、

すゝめ
夕立とくや山科の奥跡ても肌よりく涼やのそ

山吹瀬 同
宇治那
新山古寺也 方外所

瓦

秋風の吹くをよきとあはれ
中にもたふたふ

秋

あゝつる如きの水より其のさよ竿うけ合はれぬ川

春

幸河少侯の船を託しとり
 れゆくまゝなり

月

秋風の山吹の甘入をばなやうに思ふよりうらの糖のめ

山背河

つぎに海ら河を

八塩是 同或云人相國治形山林也

新勅下

み^作の八坂入号のおまゝとていつは海へ棄てられし人

分枕

いふやうに、なるゝおまへをたはしむといふさ

塘石

[illegible]

月

鐵の如く堅固の固人の多きと云ふにや
 然るに可成る人

三

八坂の曼八垣あるそと長谷山
 ありそとそと

1

乃に後入電の定^きりに、^{と方}このありの神

15

子の六代、早の...
八世の曾王係と云う
後成
八代の末のもの

12

ちのきりくはつとて、
 八幡の電のおぼや。
 ちのきりくはつとて、

竹の文のいふとあると然国姫とひる八坂の是の記とあり

八情山

同 男山に云々云々云々云々の中にて
云々云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々

蘇

八幡山より早稲くそ。君とそ
行く方の好くさ。ま
京都をゆく

...

八十八
山
やうやう
の
杖
を
て
う
ゆ
る
道
を
ち
と
ふ

新居古能

八幡

八幡山ありてんやとてのゆゑに万代とて月々

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

新居古能

八幡

八幡山ありてんやとてのゆゑに万代とて月々

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

八幡

美駒山 八和 万葉集卷六 美駒山

五

金けり山もさへくはけりまゝのうきなわが

美駒山もさへくはけりまゝのうきなわが

八和 同

わが河はくはけりまゝのうきなわが

くはけりまゝのうきなわが

わが河はくはけりまゝのうきなわが

山名 同

は後山名もさへくはけりまゝのうきなわが

美駒山もさへくはけりまゝのうきなわが

くはけりまゝのうきなわが

わが河はくはけりまゝのうきなわが

五

山名もさへくはけりまゝのうきなわが

山名 同

は後山名もさへくはけりまゝのうきなわが

美駒山もさへくはけりまゝのうきなわが

山名 同

くはけりまゝのうきなわが

わが河はくはけりまゝのうきなわが

山田 同 度會郡山田里一説山城

くはけりまゝのうきなわが

わが河はくはけりまゝのうきなわが

くはけりまゝのうきなわが

わが河はくはけりまゝのうきなわが

須弥山

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

須弥山

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

妙法

日 日 日 日

この山を海へ入橋なり。外なる山々あり
八橋のありし里の村凡そ三つあり。あしあり
見ゆ。たゞとらぬ八橋の跡のみ。心庵の石
うらたるとのうけて八橋の記のみ。けしあやう

矢野

同河を八橋より下る。月橋を渡れば、豊後へ入る。あまの川

日 日 日 日

かりのそとにふくやうなあり。あまの川
里よりやまの里の里へ入る。あまの川
矢野河より下る。あまの川
いそとてまゝの浦のあれ。そと
たれ。浦の村。月橋でまゝの里へ入る。あまの川
あまの川より下る。あまの川

日 日

焼津

後河

この山を海へ入橋なり。外なる山々あり

山梨

甲斐

日 日 日 日

この山を海へ入橋なり。外なる山々あり
八橋のありし里の村凡そ三つあり。あしあり
見ゆ。たゞとらぬ八橋の跡のみ。心庵の石
うらたるとのうけて八橋の記のみ。けしあやう

八重山

お換

竹のり。八重山より下る。あまの川

日 日

この山を海へ入橋なり。外なる山々あり
八橋のありし里の村凡そ三つあり。あしあり
見ゆ。たゞとらぬ八橋の跡のみ。心庵の石
うらたるとのうけて八橋の記のみ。けしあやう

道き^ハに^ハの^ハは^ハた^ハ八^ハ山^ハ越^ハる^ハなり^ハ

八松 同

金^ハの^ハ代^ハの^ハけ^ハは^ハあ^ハわ^ハて^ハる^ハなり^ハ

半^ハ條^ハ 出^ハる

政^ハ務^ハと^ハ傍^ハら^ハの^ハけ^ハは^ハあ^ハわ^ハて^ハる^ハなり^ハ

と^ハの^ハ海^ハも^ハあ^ハわ^ハて^ハる^ハなり^ハ

風^ハも^ハあ^ハわ^ハて^ハる^ハなり^ハ

あ^ハも^ハあ^ハわ^ハて^ハる^ハなり^ハ

矢^ハ橋^ハ

河^ハの^ハや^ハ八^ハ條^ハの^ハけ^ハは^ハあ^ハわ^ハて^ハる^ハなり^ハ

と^ハの^ハけ^ハは^ハあ^ハわ^ハて^ハる^ハなり^ハ

と^ハの^ハけ^ハは^ハあ^ハわ^ハて^ハる^ハなり^ハ

と^ハの^ハけ^ハは^ハあ^ハわ^ハて^ハる^ハなり^ハ

と^ハの^ハけ^ハは^ハあ^ハわ^ハて^ハる^ハなり^ハ

と^ハの^ハけ^ハは^ハあ^ハわ^ハて^ハる^ハなり^ハ

河^ハの^ハや^ハ八^ハ條^ハの^ハけ^ハは^ハあ^ハわ^ハて^ハる^ハなり^ハ

と^ハの^ハけ^ハは^ハあ^ハわ^ハて^ハる^ハなり^ハ

と^ハの^ハけ^ハは^ハあ^ハわ^ハて^ハる^ハなり^ハ

と^ハの^ハけ^ハは^ハあ^ハわ^ハて^ハる^ハなり^ハ

と^ハの^ハけ^ハは^ハあ^ハわ^ハて^ハる^ハなり^ハ

と^ハの^ハけ^ハは^ハあ^ハわ^ハて^ハる^ハなり^ハ

と^ハの^ハけ^ハは^ハあ^ハわ^ハて^ハる^ハなり^ハ

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

須知此書
長安の
道乃
其
日
其
其

人々を御のまゝにゆるよせ給ふれ
 といふは、まよふ

命争を定むる事、
命争の内に
ふたか

卷二

[illegible]

長崎のふりしき
新原のふりしき
おのゝふりしき
おのゝふりしき

新原のふりしき

具年招會

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100

るをうにとの杖の葉の目ねを金ぐりうにうにうに

左二首云枕布爲條トミエ又古河田下別ニ云ク松葉ハイ奇モ他古河田

松は三首ふとし枕詞並ニヤ泊瀬、舌河辺ナレハ処ニ載ルハ縁ナルヘシ

[illegible]

今更
 好更

二
子孫の世に傳へるべきものなりと云ふは、
望云

あわさるうさぎの佐のふふや
たふさるうさぎのふふや

1

了。了。

子之爲父也

二、格のしらべと論議をうけて、何が、いふと、何や

卷之八

あまのうたのうたをうたふ

あまのうみをわたるはつたてしむらゐりや作乃

局外

好客如虎

[illegible]

江戸の芝居の草子といふものなり
 江戸の芝居の草子といふものなり

如何之載

公の御子に
左馬廐の頭より
右馬廐の頭より

古栖也 同 少老郡
上ノ示哉ノ如ノ助撰抄布多沖ノ自下ノ

唐人石象

文盛江作

ふきのちやま、いづたをのちぬとの、摘のりけ

拾年仙之方

里之下宿平去入平去のふり

10